存在と言語

——ベルクソンとW. ジェイムズ——

紺　田　千登史

I

フランスのある研究者によると,ベルクソンはみずからの哲学の方法を明らかにしようとした論文,『形而上学入門』において,実に,三十八回にもわたってシンボル（symboles）の語を用いている,というが[1],これはまさに,ベルクソンがこの語が表わすものに対して,いかに重大な関心を払っていたかを示すものに他ならないであろう。ところでこの場合のかれの関心とは，具体的にはどのような性質のものであったであろうか。それに答えるために,まず,上記の論文のはじめの数行を読みかえすことから始めることにしよう。「形而上学の定義や絶対的なものの概念を相互に比較してみた場合，あるものを認識するにさいして哲学者達は，その外見上の違いにもかかわらず，二つの根本的に異った方法を区別する点で，たがいに一致していたことが解る。すなわちその第一は，このものの周囲をめぐることを前提とし，第二は，このものの内部に入りゆくことを前提にしている。第一の方法は，われわれが身を置く視点と表現のさいに用いるシンボルに依存する。第二の方法は，いかなる視点もとらず，また，いかなるシンボルにも依存しない。」[2] ところでこの後の第二の認識の方法といわれるものこそ，実は，かれのいわゆる哲学に固有な方法としての直観に他ならず，もしもそれが本当に採用されるならば,われわれに当のものについての絶対的な認識をもたらす，といわれるものであるのに対し，第一の認識方法とは一般に分析的方法と呼ばれているものであって，われわれの日常の思考から科学的思考までの広い範囲にわたって用いられてはいるものの，前者と異り，どこまで行っても所詮は相対的な認識しかもたらすことが出来ない，とされるものなのである。したがってシンボルはこの文脈から言えば，われわれに相対的認識しかもたらさない分析にもっぱら関わるもの,ということになり,絶対的認識とはいちおう無関係だ，ということになるであろう[3]。しかしそれにしても，いったい，どのような理由でそうしたことが言えるのであろうか。

ベルクソンがこれらの両認識の性格の違いを明らかにするものとして最初に取り上げている具体例は，周知の通り，物体の運動に関するものである。そしてここではシンボルをまず，われわれが運動体を外部の一視点より捉え，その動きを次々に翻訳していくところの座標，ないしは目印を提供する軸の意味に用いている[4]。すなわちベルクソンによれば，われわれが普通，ある物体の運動を捉えた，というとき，実際には運動そのものではなく，むしろその物体がみずからの運動にともなって一定の空間上に残していくと考えられる軌跡を捉えているに過ぎない,ということなのである。つまり,そこでは本来の運動が,軌跡というたんなるシンボルにすっかり置き換えられてしまっている，というわけである。もっとも，われわれがこのように運動をそれ自体としては捉えず，上のようにもっぱら空間上の諸点間の関係に置き直して捉えているに過ぎないとしても，そこにそうした置き換えの充分な自覚がある限りはとくに問題はない，というべきかもしれない。しかし現実には必ずしもそうでないところから様々な

1) Cf. A. Grappe : *Bergson et le symbole* (Bulletin de la Société Française de Philosophie, 1959), p. 123.
2) *La pensée et le mouvant* (以下 P. M. と略す), pp. 177-178.
3) ただし，絶対的な認識をもたらすとされる直観といえども，その内容が人に伝えられるためには，何らかの仕方によるシンボル化の手続きは避け難いことであろう。この点については以下にも若干述べるが，拙論『構想力と表現』(「関西学院大学社会学部紀要第41号所収）も参照されたい。
4) Cf. P. M. p. 178.

問題が，しかも本来なら問題となる筈のないような問題，すなわちベルクソンのいわゆる「似非問題」までが生じることとなるのである。例えばベルクソンは処女作『意識の直接与件についての試論』，すなわち通称『時間と自由』以来，おりにふれてエレア派のゼノンによって提出された運動にまつわる詭弁を取り上げるのであるが[5]，これは運動にたいする日常化した思考方法についてのわれわれの無自覚性と，その根深さをもののみごとに映し出す例だからではないであろうか。すなわちゼノンの議論とは，亀より後から出発するアキレウスはいつまでも亀を追い越すことが出来ない，なぜならアキレウスが亀の出発した地点までくれば亀の方はたとえわずかにもせよそれよりも先の地点にまで進んでいるはずであるし，さらにアキレウスがこの亀の進んだ地点まで達したとしても，その間に亀はまたさらにわずかながらも進んでいようから，というものである。ところでこの議論は，初めて聞く人にとっていつも一見もっともらしく，したがってまたその分だけ難問らしく立ち現れるのであるが，それはベルクソンによれば，実は，われわれが生活の便宜上，時間の経過の中で生起するものを空間の形で表象し，運動を静止するものでもって置きかえることを至極当然のように行なっている習慣となった思考方法の盲点をまさについているからにほかならないのである。なぜならこの議論は，アキレウスと亀の実際には不可分な運動を，かれらが空間上に残していくと考えられるいかようにも分割や再構成の可能な軌跡とまず同一視した上，ひそかにアキレウスの歩幅をもう一匹の別な亀の歩幅とすりかえることによって，すなわち本来はアキレウスと亀の競争であったものを，いつのまにか二匹の亀どうしの競争にすっかり置き換えてしまうことによって成立っている，と考えられるからである。むろん，話がこのようにたんなる運動の議論にとどまっている間は，そこにはまだ大して深刻な問題の出てくる心配もなさそうである。しかしかような思考方法がいったん現実の具体的な人間の把握にまで適用される，ということになると事態の様相は一変するであろう。なぜならたんなる運動体（アキレウスの身体も亀の動きと単純に比較されている限りはたんなる運動体と考えてよい）の場合だと，その運動がたとえどのように表現されようがそれによってなんら影響を受けることはないが，人間の場合には，かれがどのように表現されるかによって実際に大いに影響を受ける，と考えられるからである[6]。『形而上学入門』においてベルクソンが運動一般のシンボルへの置き換え，ということに引き続いて取り上げるのは人間のシンボル化，とり分け人間の言語表現にまつわる問題である。かれはこれをまず，作家による小説の登場人物の記述と関連づけて論じている。たとえば，「登場人物について語られる一切のことは，それぞれその人物に対する同数の視点をわれわれに提供するものである。また，当の人物を描いてはいるけれども，わたしがすでに知っている人物，あるいはものとの比較によってしかわたしにその人物のことを認識させることの出来ないような特徴はすべて，それによって多少ともシンボル的に当の人物が表現される記号に他ならない。それゆえシンボルと視点とはわたしをその人物の外部に位置づけるものであって，その人物に関してはもっぱら他の人達とかれが共通にもつもの，かれのものではあってもかれ固有のものとはいえないものしか提示しないことになる。」[7]などというように。むろん，小説などの場合，登場人物が作家の想像力の中でいったん，自由な，ひとりの独自な個性をもつ存在として構想せられて生き始めると，かれの次々の行動は一定のリズムと流れをもった文章の中で様々な動的なイメージを伴ったことばを通して表現されていくことになるから，最終的にはわれわれ読者も作家のそうした手法に助けられて，次第にたんなる相対的な表現手段としての言語のレヴェルを越え，作家の捉える人物像にかなり近いものを捉えるようになる，というべきなのかもしれない[8]。つまり言語を媒介にするといっても，この場合は，その人物の実質をなしている通約不可能な内面の

5) Cf. *Essai sur les données immédiates de la conscience* (以下 D. I. と略す), p. 184.
6) これは C. ロジャーズなどが「自己概念」の考えの中で大いに強調している点であろう。
7) P. M. p. 179.
8) Cf. P. M. p. 95.

動きにまで相当程度迫りうる，ということだ。しかし問題は，はたしてわれわれが普段の生活においてもこのようにたんなることばのレヴェルを越えてひとや自分自身を捉えているだろうか，ということである。ことばを越えて動的個性的な人間に迫るかわりに，むしろ人間をことばの側に引き寄せてこれとすっかり同一視し，もっぱら固定的一般的に扱っているところがないだろうか，とベルクソンは問うのである。

さて，ことばがわれわれに関してさし当りそれしか表現しえない，といわれる他の人達とも共通にもちうる側面とは，換言すれば，われわれが社会的に規定されている側面，ベルクソンがしばしば「社会的な自己」と呼んでいる側面のことである。そしてなぜそのようなことになるのかと言えば，ことばはもともとわれわれにとって一個の客観的な対象として静止的に，かつ一定の類を代表するものとして出現しうるものにしか適用しえないように出来ているということ，それゆえ結局，われわれ自身におけるそうした扱いを許す側面とは，われわれがともに生活する人々の目によって外部より捉えられるかぎりでのわれわれ，すなわち社会的に規定されるかぎりでのわれわれでしかありえないからなのである。実際，われわれはそれぞれの誕生以来，両親をはじめとする様々な他者の視点からの規定を受けながら成長する。例えばまず生物学上の特徴にもとづいて男女のいずれかに分類されるとそれに相応しい名前が与えられ，やがてわれわれの社会や時代のもつ一般的な男性像や女性像に合致するような方向で一定の躾けや教育がほどこされていく。そして一通りの学習課程が終了するとともに，次にはいよいよそれぞれの社会的な役割が与えられるのである。また，他方，われわれがいかなる集団に所属するかということも，上記の規定以外の規定としてさらに付け加えられる場合もあるであろう。しかしわれわれがそのつどどのような規定を受けるにせよ，それはつねにわれわれを何らかの類に属する一員として一般的な範疇によって示すことが出来るだけである。また，われわれ自身がこうした規定をみずからを表わすものとして自覚的積極的に受け容れるようになっても事情はまったく変らないのである。すなわち他者の目を通して見られる自己と言っても，一定の年令に達するとそれをわれわれ自身でも捉えることが出来るようになるし，そこにはまたある種の自覚が，すなわちわれわれの社会的な存在としてのいわゆるペルソナの自覚も成立してくるであろう。そしてこの種の自覚こそ，実は，われわれの現実の行動を導いているものなのである。意味論者の S. I. ハヤカワがいみじくも述べているように，こと人間の行動原理に関するかぎりは他の生物と同じようにたんに自己保存の要求にもとづけるだけでは説明しきれないものが数多く存在するのであって，それらはすべて自己保存の要求ならざる自己概念像保存の要求にもとづけることによってはじめて了解しうるものとなるのである[9]。戦時に輩出するそれぞれの祖国の英雄たちをはじめ，平時における種々の探検家らの行動は，人間はときとして生命の要求によりもむしろみずからの名を高めようとする要求に従うものであることを示す典型的な事例ではなかろうか。また，例をこれほど極端なところに求めずとも日々のわれわれ一人ひとりの営みをちょっとふり返ってみるだけでも，それらを動機づけているのは生命の直接的な要求とはほど遠いいわゆる役割意識，すなわち社会によって指定された役割の各個人における一定の内面化を通じてえられる一種の義務意識であることが容易に解るのである。むろん，役割意識というものを，たんに受動的な側面のみから捉えることは誤りであろう。なぜならそこには G. H. ミードが強調している通り，すでに社会組織の中に組み込まれ対象的に捉えることのできるものとなった自己としての「me」の自覚の他に，それを積極的に引き受け，みずからの創意と工夫にもとづいてそのつど与えられた状況そのものを変えていこうとする主体としての自己，すなわち行為の発動者として決して対象化することの出来ない「I」の存在が同時にみとめられるからである[10]。とはいえ，こうした主体性というものも，大きくは社会によって各個人に指定

9) S. I. ハヤカワ『言語と思考』(四宮　満訳，南雲堂)，50-66頁参照。

10) Cf. G. H. Mead, *On Social Psychology* (Selected Papers) (The University of Chicago Press), pp. 228-233. 邦訳『精神，自我，社会』(稲葉他訳，青木書店)，186-191頁参照。

されたものとしての役割にあくまでも依存するものである以上，その根源的な他律性は蔽うべくもないし，また，その種の積極性がかえって個人における本当の意味での自発性の抑圧となっている場合さえ考えられるのである。例えばE. フロムが近代人の行動に関して，それがいかにも情熱的に遂行されているように見える場合でも，（「工場主」とか「労働者」といった）たんなる社会的な自己に発しているときには，かれの全体的な自己はむしろそのために縮められ，パーソナリティ全体の他の部分をしめ出す結果になっていることがある，と述べているのは，まさにこれにあてはまるであろう[11]。けだし人間は，たんに思考能力や意志だけから成立っている訳ではなく，感覚や感情，直観能力等々といった他の多くの側面をも同時に有しているからである。

以上ベルクソンの議論から若干話がそれてきたきらいはあるが，人間を言語的に表現するさいに生じる様々な問題について多少とも明らかになったのではないかと思う。ところでこの点に関するベルクソンの見解の表明は，運動に関してと同様，実は『時間と自由』にまで遡ることができるのであって，この著作においてもすでに，われわれの内面生活の記述との関連でことばがいかにものごとの一般的な側面しか捉えないか，という点や，その固定的にものごとを処理しがちな性格についてはっきりと述べているのである。例えば次のような有名な個所がある。「私がいま一輪の薔薇の香りを嗅いだとしよう。そして子供の頃の色々な想い出がそれと一緒になってたちまちのうちに記憶に蘇ってきたとしよう。本当をいうと，これらの想い出は薔薇の香りによって喚起されたものでは少しもない。（むしろ）私は香りそのものの中にそれらの想い出を嗅ぐのである。香りは私にとってそれらのすべてなのだ。他の人達はまた違った仕方でその香りを感じることであろう。『香りはいつも同じなのだが，ただ違った観念と連合せられるだけだ』と言われるであろうか。私はそのような言いまわしで表現されてもかまわないと思う。しかし忘れてならないのは，その場合，薔薇がわれわれ一人ひとりに及ぼす印象，それらの印象の個性的な点が最初から排除されている，ということなのである。薔薇の客観的な側面，薔薇の香りの中で共通領域に属しているもの，要するに空間に属しているものしか保存されてはいないのである。もっとも，かような条件においてのみ薔薇やその香りに名称を与えることが出来たわけであるが……（いずれにせよ）ここで言われる連合なるものは，そのように言う人にしか，そして一定の説明の仕方としてしか存在するものではないのである。それはちょうど，多くの言語に共通なアルファベットのいくつかの文字を並べることによって，ある特定の言語に固有な音を（なんとか）写しとることができるようになるとしても，これらの文字中どれひとつとして音そのものを構成するのに役立ったわけでないのと同様なのだ。」[12]
われわれが直接に経験するわれわれ自身の意識というものは，どこにもはっきりとした切れ目というものをみとめることができず，たえず質的な変化を遂げていく一つの独自な流れ，すなわち純粋な「持続」であることを様々な局面を通して明らかにすることが，そもそも，『時間と自由』という書物の中心テーマであった，ということができる。言い換えれば，われわれがみずからのそのつどの意識の中にあえて一定の部分というものを見出そうとしても，それぞれの部分の周辺では他の部分——それが前者と較べていかに異質なものに見えようとも——と相互に浸透し合う形で連っているから，結局のところ，明確な区分ができなくなる，ということなのである。むろん，このような見方は意識に対するわれわれの通常の見方ではない。しかしそれは，ベルクソンによれば，われわれが意識について観察する事柄を述べようとするさい，たいていの場合，自分達の用いる言葉によって欺かれてしまうからに他ならないのだ。すなわち，ことばは連続的で質的な流れとしての意識自身の側面によりも，むしろ，意識がみずからの内容としている比較的に静止的な対象に注目するようにできているから，意識自身を記述しなければならないときにもややもすると意識の対象の側に引き寄せられて，まるで意識もまた対象と同

11) E. フロム『自由からの逃走』（日高訳，東京創元社），126頁及び134頁参照。
12) D. I. pp. 121-122. なお，（　）内の語は筆者が補った。

様，容易に言語表現を許すところの一定数の要素よりなるかのごとく扱ってしまう，ということなのである。上のベルクソンの文章はまさにことばのもっているこうした問題点を，一つの明確な例でもって明らかにしようとしたもの，ということができよう。

ところでわれわれが自分達自身の意識をみつめる目をひとたび獲得すれば意識は不可分な質的な流れとして立ち現れる，というような以上のような言い方は，別の言い方をすれば意識はそれ自身としては一つの有機的かつ全体的な動きであるということ，言い換えれば，そのときどきのどのような顕現にも全体がつねにその背後にひかえている，ということになるであろう。事実，ベルクソンは共感や反感，愛情や憎しみといった一般的なことばで表現されるような感情でも，それらが充分に深いものである場合には，われわれのこころの全体を反映することができる，というような言い方をしているのであって，しかもベルクソンの場合，こうした意味での自己表現にこそ，実は，われわれの本来の自由がみとめられるのだ，とするのである[13]。すなわちベルクソンによれば，われわれははたして自由なのか，それともたんに宿命的な必然の法則に従っているにすぎないのか，といういわゆる自由の問題をめぐってのこれまでの議論がなんらの決着もみないまま今日にまで至っているのは，自由を肯定するものも否定するものもともに，ことばの一般的なものへの根源的な指向性や，固定的要素主義的にものごとを把握していこうとするその特性に無批判，無自覚であることにもっぱらもとづいているのである。例えばS. ミルやA. ベインのような連合論の立場に立つ決定論者は，自己というものを言語で表現可能な諸々の心理状態の集合とみなし，それらの中のもっとも強いものが主要な影響を及ぼして他のものを必然的に導いていくといった形で議論を進めているし，また，フィエのような決定論の反対者でさえ自由はまず自由の観念に発すると考え，かような観念がわれわれのこころの中で他の観念と対抗して主導権を握り，われわれの行為の動機となったときはじめてわれわれは自由な行為を行なうようになる，といった議論の組み立て方をしているのである[14]。しかし決定論者の言うような個別的で言語的にも表現可能なこころの諸状態といったものは実際には存在しないし，またその反対者の言うように，こころというものが相互に独立な諸観念から成立しているわけのものでもけっしてないのである。こころをかかるものとして直接に捉えようとするかぎり，それはむしろつねに不可分の，それゆえにまたつねに一つの全体をなすところの質的な流れ，ないし過程として現れるものなのである。そしてこのようなこころの全体，たましいの全体から生れる行為こそ自由な行為というものだ，とベルクソンはいうのである。なぜならそこではまさにわれわれの自己だけが行為の作者であるし，そこにこそ自己の全体が表現されている，と考えられるからである。

ことばというものが意識や自由の理解をいかに妨げるものであるか，とういことについてのベルクソンの強調点をこれでいちおう明らかにしえたと思うので，次にそれの原因となっていることばの一般的なものへの指向や固定性のよってきたるところを明らかにしていかなければならない。すなわちそれは，ことばとはそもそも何であり，また何のために存在してきたかを問うことに他ならない。ただしこの問いに答えるに先立って，人間の行動は大きく二種類のものに区別しうる，ということを確認しておくと便利かもしれない。すなわち心理学者のA. H. マズローの用語を借りて言えばその一方は「対応行動」(coping behaviors)，そしてもう一方は「表現行動」(expressive behaviors) ということになるが[15]，ベルクソンの言う意味での自由がまさにこの後者の「表現行動」に相当するのに対して，人間にはこのような段階に到達するまでに直接的な環境としての社会に適応し，仲間たちとの協働を通して間接的に生命体としてのみずからの身の安全を確保していくという「対応行動」の段階がまず通過すべき段階として存在している，ということなのである。そしてことばというものは，なによりも，

13) Cf. D. I. pp. 124-125.
14) Cf. D. I. pp. 119-120.
15) Cf. A. H. Maslow, *Toward a psychology of being* (D. Van Nostrand Company, Inc.), p. 172.

この「対応行動」を容易にするためのもっとも基本的な手段として各個人に対し授けられるものなのである。ちなみに子供達がものの名称を学習するさいには当の名称で呼ばれるものに対しいかなる反応をしなければならないかを同時に学んでいくのではないであろうか。そしてそれこそことばの意味というものではないであろうか。もっとも，子供達がことばを学習することができるためには，それなりの条件があらかじめかれら一人ひとりにおいてもととのっている必要があるであろう。すなわちそれはJ. ピアジェのいわゆる感覚・運動的知性（l'intelligence sensori-motrice）[16]の存在であって，ベルクソンにおいて言語論を見ようとする場合，実は，このレヴェルにおける研究がもっとも大きなウェイトを占めているのである。そして同様な立場からことばの問題を正面から取り上げるのは，ベルクソンよりもむしろ生前ベルクソンと親交があり，思想面で相互に深い影響を及ぼし合ったW. ジェイムズの方なのである[註1]。以下個体レヴェルにおける言語成立の諸条件をベルクソンの『物質と記憶』[17]の中でまず見た上，引続いてW. ジェイムズの『心理学の諸原理』[18]や『哲学のいくつかの問題』[19]などに現れる言語論[註2]の順に見ていくことにしたい。

（註1） ベルクソンとジェイムズの相互的影響ということについては多少慎重を要する点もあろうかと考えられるので，ここでベルクソンの生前の手紙などを集めた『書翰と講演』などに表われている文章を通して大体の見当をつけておくことにしよう。さて，この書物の第二巻目には1903年1月6日付のジェイムズ宛の最初のものと思われる手紙が収められているが[20]，ここでベルクソンは，まず，ジェイムズから贈られた『宗教的経験の諸相』よりきわめて深い感動を受けたことを述べたあと，実は，自分は十数年来ジェイムズの熱烈な支持者であったし，また，そのことに関しては自分の受講生らがすべて証人である旨を告白している。また，さらに，『時間と自由』執筆当時はジェイムズの論文としてはまだわずかに『努力の感情』[21]しか知らなかったとはいえ，時間の観念の分析などを通して結果的には心の営みについてのジェイムズの心理学（『心理学の諸原理』）に大変近い考え方に到達していた，とか，ジェイムズが『物質と記憶』の心身分離ならびに両者の結合に関する考えに賛同してくれたことほど嬉しいことはなく，『人間の不死』[22]において示されているのが心身関係についてのジェイムズの考え方だとすれば，この点においても自分達の立場は非常に近いもので，いずれは一つになるはずである，などとも述べているのである。ところでこのようにベルクソン自身がジェイムズとの間の類縁関係を積極的に肯定し，そのことを多勢の受講生を前にたえず公言していたことが逆に人々の誤解を生むことにもなったようである。1905年7月10日付の『哲学雑誌』[23]の編集長宛の手紙[24]では同誌の掲載論文[25]に次のような文章が見えるがこれは正確ではないので訂正して欲しい旨の申し入れを行っているのである。すなわちこの問題の文章とは，「『時間と自由』の著者があの有名な内的な流れという考えに導かれたのは，まず，主としてウォード（Ward）の影響のもとにおいてであり，若干はW. ジェイムズの影響のもとにおいてであった。……（しかし）もしもわれわれがアメリカから心理学を導入したとすれば，おのずからなる交換によってわれわれはかの国に対して哲学をもたらしたし，また，それゆえにこそW. ジェイムズの講義の中で実践の優位性についてのベルクソンの考え以外のものをみとめることができなかったのである。」というものであった，というが，第一の点に関しては『時間と自由』の執筆中はウォードの論文はおろかその名前さえ知らなかったし，また『心理学の諸原理』は1891年の出版

16) Voir par exemple J. Piaget, N. Chomsky : *Théorie du langage, Théorie de l'apprentissage* (Seuil), p. 61.
17) *Matière et mémoire*（以下 M. M. と略す）。
18) W. James, *The Principles of psychology* (Harvard)（以下 Pr. Ps. と略す）。
19) W. James, *Some problems of philosophy* (Harvard)（以下 S. P. P. と略す）。
20) *Ecrits et paroles*（以下 E. P. と略す）, Tome Ⅱ, pp. 192-193.
21) Cf. D. I., p. 16.
22) W. James, *Various aspects of religious experience* (Havard) 所収.
23) *Revue philosophique*.
24) E. P., Tome Ⅱ, pp. 238-240.
25) 正確には Gaston Rageot という人の論文。

であるが『時間と自由』は1889年で影響を受けようにも受けようがなかったではないかと反論するとともに，第二のジェイムズに対するベルクソンの影響という点については『物質と記憶』が出た時点でジェイムズ自身，自分はもう何年も同様な方向で仕事を続けている旨の手紙をベルクソンのもとによこしており，これも第一の点同様，問題にならないことだ，というのがベルクソンの言い分なのである。そして1908年7月23日付のジェイムズの『多元的世界』[26]寄贈に対する礼状の中ではこうした状況をふまえた上のことだったのであろう，「われわれの思想をたがいに一致させている≪予定調和≫」[27]ということばを用いることによって相互の独立性をもきちんと押さえるような言い方をするようになるのである。しかしそれにしても両思想家の関係を表わそうとするこうした表現は，なるほどベルクソンがジェイムズの『心理学の諸原理』をまだ知らず，また，ジェイムズもベルクソンの『物質と記憶』の存在を知らなかった時期における双方の思想の一致を指摘するものとしては問題はないとしても，両者がたがいの重要な著作を知るようになってからのちのことについてもなお，妥当性をもち続けている，といえるであろうか。ベルクソンは同じ手紙の中でジェイムズの『多元的世界』がベルクソンの思想を紹介するためにわざわざ一章をさいてくれていることに大変感激している，と述べるとともに，この章ではすぐれた版画家が凡庸な画家の作品からえてしてすばらしい複製を生み出すことがあるように，ジェイムズは自分の思想の根本を決して歪めることなく，むしろそれを「よりいっそう美しいものにし」(transfigurer) てくれている，として心からの感謝の意を表明している。ところで複製という表現は必らずしも適当でないとしても，両者が互いの存在を知ったのちは少なくとも相手からの影響をまさに上の譬えが示すようなやり方でそれぞれがみずからの世界へと摂取し，同一化していった，というのが本当のところだったのではなかろうか。あるいは≪予定調和≫という表現をそれでも，なお，生かし続けなければならないとすれば，両者においてそれまではたんなる可能性として内に秘められていた互いに相似通った傾向が，また場合によっては互いに相手の足りないところを補い合うような傾向が出合いを契機としてその開花が促進されるようになった，と言い直してもよい。われわれがベルクソンに引き続いてジェイムズを取り上げようとしている理由も実はそこにあるのである。

（註2） 念のために言えば，ベルクソンの『物質と記憶』は1896年，ジェイムズの『心理学の諸原理』は1890年の発刊であり，刊行の順序からいえばジェイムズの方が先であるし，ベルクソンがこのジェイムズの著作を実際に読んでいたことは『物質と記憶』の中で参考文献として挙げている[28]ところからも確認できるのである。ただ，ことばの成立する過程という点に注目する立場からわれわれはベルクソンの方からまず取り上げざるをえなかった。したがってもちろん「(註1)」で述べたような形でではあるが，ベルクソンがここでジェイムズより学んだと認められるようないくつかの点が実際には指摘できるのである。例えば以下にも述べることであるが，『物質と記憶』の第一章でわれわれの知覚に現われる対象はその一つひとつをそれ自体としてみればまさに宇宙の全体と関係を有しているはずだが，しかしわれわれは生活者としての立場から通常，意識化をもっぱらその一部に限って行なっているに過ぎない，という「選択」の考えや，ことばの前提となる一般観念成立の背景に「類似の知覚」と「差異の知覚」という相反する性格のものの間のダイナミックな総合の過程をとらえていこうとしている点などがまさにそうである。

II

『物質と記憶』における思索の出発点は，われわれが日常経験しているごくありふれた知覚的経験の世界である。すなわち，われわれが目を開ければ知覚し，閉ざせばいったんは姿，形は見えなくなりはするけれども，それだからといってそれが今しがた知覚した通りに存在していることをつゆほども疑わない世界である。この世界は様々な対象から成立っており，しかもそれらは私

26) W. James, *Pluralistic universe* (Harvard).
27) E. P. Tome II, p. 304.
28) Cf. M. M., p. 109.

の身体を中心に遠近法的に拡がっている。ところでこの遠近法的な知覚内容の配列であるが，これは具体的には何を意味しているのであろうか。この問いに対するベルクソンの答えはきわめて単純である。すなわちわれわれが身近かに知覚する対象は，それらに対するわれわれの反応がそれほど時間的な間を置かずに遂行可能なことを示し，逆に遠くなるほど反応に時間を要することを示しているにすぎないのである。そして当面われわれの行動とかかわりのない他の無数の対象は，われわれの知覚野からすっかり閉め出されてしまっているのである。つまり知覚というものは科学者のいわゆる純粋認識などとは異り，元来，われわれの生物としての自己保存をまっとうするための行動と深く結びついた認識，身体の可能的行動の領野を開いてみせている認識だ，ということである。科学者がものごとのあくまでも客観的で理論的な認識を目ざす，という一般に行なわれている言い方に合わせていうなら，知覚は未だものごとが主客に分けて把握されるよりも以前の世界についての認識，われわれの生命をもった存在としての行動ともっぱら対応するところの環境的世界の認識である，ということができよう。ところで上でわれわれの知覚の領野に入ってこない対象群について触れたが，これはなにもわれわれが知覚を無限大の方向に拡張していこうとしてできない場合に問題となる対象にかぎったことではないであろう。なぜならかりにわれわれの身近かにある対象を何か一つとり上げてみただけでも，それ自身としては無限な宇宙のあらゆる方向からの影響を受けているわけであるから，実際にはわれわれの知覚を無限に超えるものを内に宿している，といえるからである[29]。ライプニッツはモナッドの一つひとつは，それぞれの視点から宇宙を映している鏡である[30]，と述べたが，われわれはこれとまったく同様のことを，身のまわりのどんなささやかな対象についても言うことができるわけである。したがってこれらのことをここでもう一度あらためてわれわれ自身の立場から捉えかえすならば，知覚というものは，その全体としてのみならず部分においてもまた選択だ，ということになるであろう。そしてこれら二方面でなされる選択の目指すところはいずれもすでに述べたように，われわれの身体的行動と知覚的世界を具体的に関係づけるところにあるのである。換言すれば，知覚はなによりもまず，われわれの反応に対する対象の側からの直接的な問いかけであり，要請[31]である，ということだ。もっとも，われわれは普通かならずしもそのようには考えない。それはわれわれがややもすると身体というものを環境とは独立なシステムとみなした上，神経組織の機能をまず知覚を生ぜしめ，引き続いて運動を生むもの，というように考えがちだからである。しかしわたしの身体に刺激をもたらす対象と，やがてわたしが何らかの影響を及ぼすことになるかも知れないこの同じ対象との間に介在する神経組織というものは，実際には運動を伝えたり，それを分割したり，また禁止したりするだけのたんなる伝導体の役割を果すものにすぎないのである[32]。したがってもしも表象としての知覚が成立する場所をなおも問題にしつづける，というのであれば，われわれはそれをむしろ普段素朴に信じている通り，対象の知覚が成立しているまさにその当の場所，すなわち知覚対象が存在しているところにこそ求めなければならないことになるのである[33]。次にこの点と関りをもつベルクソンの文章を引用しておこう。文中のPとはいま光を発し，わたしの知覚内容となっているある光源のことである。「意識の中で形成せられ，やがてPに投影されることになるような拡がりのない心像のようなものは（ここには）なにひとつ存在しない。本当を言えば，P点やそれが放射する光線，網膜やそれに関係する神経組織はたがいに連帯関係をもった一つの全体をなしている，ということ，……またPのイメージが形成せられ知覚されるのは，まさに，P点においてであって他の場所においてではない，とい

29) Cf. M. M., p. 33.
30) Cf. M. M., p. 36.
31) Cf. M. M., p. 45.
32) Cf. M. M., p. 43.
33) Cf. M. M., p. 45.

うことなのである。」[34] むろん，この場合でも例えば中枢へとつらなっている視神経がその一部で切断されたりすると知覚もまた消滅することは否定できないであろう。しかしそれは表象を生む器官が損傷を受けたがゆえであるとする必要は少しもなく，対象から発せられた刺激がもはや中枢に，またしたがってそこから運動神経の方面へと伝達されなくなるからにすぎないのである。換言すれば，知覚はこの切断によってたんに無効となっただけだ，ということである。実際，この点におけるベルクソンの考え方は徹底しており，物質の知覚というものはかりに神経組織の協力や感覚器官がなくとも理論的には充分考えられる，とするところまでいくのである[35]。むろんそれは現実には不可能である。というのもこの種の知覚は何の役にも立たない以上，いつまでも無意識の状態にとどまっていなければならないからである。しかしこの場合の無意識とは決して意識が存在しない，というのではなく，たんに潜勢的ないし可能的な意識を意味するにすぎないのであって，ベルクソンはこの点でもまたライプニッツ的な考え方を踏襲するのである。

知覚についてのベルクソンの考え方がこれでだいたい明らかになったと思うので，次に，こうした知覚に対応するとされる二種類の記憶に話を移していかなければならない。すなわち一方はいちおう記憶という名称で呼ばれはするものの実は身体に形成される運動習慣のことであり，もう一方は本来の記憶，すなわち過去の知覚の現在における再現としての表象的記憶のことである。さて，まず運動習慣についてであるが，これが確認出来るのは多くの日常化した行動や動作などの場合のように，われわれが対象を知覚するやいなや直ちに反応するような場合である。当初はそれぞれ幾多の試行錯誤を経ながらの反応であったものが，反復されるにしたがって次第に運動機構の中に一定の形式が習慣として出来上り，いまや一瞬の知覚だけで的確な反応が可能となっているわけである。またここで特に注意しておかなければならない点は，こうした習慣的となった反応形式は必ずしもつねに同一の対象のみに適用されるとは限らず，場合によっては感覚のレヴェルで一見相当違っているように見える対象にも適用されることがある，ということである。そしてなぜそのようなことが起こりうるのかといえば，それは外見上の違いをこえて，例えばこの後者の対象が先の対象と同様，われわれの同種の傾向や必要[36]を満足させるからに他ならないのである。換言すれば，われわれにとって同種の傾向や必要を満足させる対象に対しては，感覚の上で多少の差異があっても反応はもっぱら同じ形式のもとで行なわれる，ということである。しかもこうした反応の同一性はやがて対象の側にも投影されるようになり，最終的にはかえって逆に対象相互間の類似として把握されてくるであろう[37]。いわゆる「類似の知覚」[38]がこれに他ならない。ベルクソンはこうした事情はあたかも草食動物がかれらの生得の本能にしたがって「牧草一般」を知覚することにも通じるものであるとし，そのつどかれらが置かれる状況がいかに多様なものであれ，もしもそこにかれらの同一の要求に応えてくれる草があるならば，かれらはおのずからそれらにいつもの力を感じとり，引き寄せられていくのと同様だ，と述べている[39]。

しかしながら人間の行動がいかに日常化し習慣化しようとも，動物の本能的な行動，換言すれば知覚と反応が直結しているようないわゆるシグナル行動と重ね合わせてみることが出来るほど似通ってくるようなケースは実際には非常にまれであり，むしろ，知覚から反応までの間に多少とも逡巡の時間的なずれがあるのが普通であろう。それは人間の行動にはたいていの場合，上のようなものごとの類似をもっぱら把握させる習慣としての記憶とは別に，ものごとの差異や個性を把握させる表象としての記憶の介入があるからにほかならない。次にこの点をみていこう。

34) M. M., p. 41. なお（　）内の語は筆者が補った。
35) Cf. M. M., p. 43.
36) Cf. M. M., p. 176.
37) Cf. M. M., p. 178.
38) M. M., p. 173.
39) Cf. M. M., p. 177.

さて先刻，もとの無限な宇宙よりわれわれの身体的行動の必要からその一部分に限って意識化されたものが知覚であるとするベルクソンの考え方をみたのであるが，実は，こうしてとらえられた知覚は決してその場かぎりで消滅していくのではなく，他方で，現在の一定の幅をもった意識の中に表象的記憶ないしイメージの形で保持されていく，という事実にも注目する必要があるであろう。例えばいま眼前のある対象をわたしが注視する場合，そこには次々と対象の新たな属性を発見していく未来的な側面がある一方で，対象の直前の過去のイメージからすでに一定時間経過した過去のイメージにいたるまでを，一つのまとまりの中に保持し続けている側面のあることも分かるのである。いやたんにそればかりではない。現在の対象のイメージの他に，必要に応じて過去において経験したことのある他の類似する対象のイメージまでもが実際には動員されるのである。ところでこうしたイメージであるが，これは知覚が対象を受容するだけなのに対して，対象と同じか，またはそれに類似するものをみずからのうちに別個に持とうとする意識のもっぱら自発的な働きによって生み出されるものなのである[40]。そしてその目的は，まずなによりも，与えられた知覚内容に対する確認，ないし問い合わせのためのいわば仮説[41]を構築するところにあるであろう。ベルクソンが注意というものを一般的に論じるさい，重要な至急電を受信した電信技手が，正確を期するためにそれをもう一度発信元に一語一語打ち返して再確認していく作業に言及している[42]のは，まさにイメージのこうした役割を明らかにしようとするためにほかならない。いったい，自分はいま何を知覚しているのであるか，他の類似する対象といったいどこが違っているのか，要するに現在知覚している対象の個性や独自性にあくまでも注目しようとするのがこの種のイメージの構成や再現の意義なのである。それゆえ対象間の類似にのみ注目する習慣的記憶に対してもつ表象的記憶の相補的な性格はいまや充分明らかであろう。つまり前者が，類似する対象どうしといえどもなお多くの場合，存在しつづけているにちがいない差異というものを一切無視して，ひたすら機械的に同一の反応を繰り返そうとするのに対し，後者はいったんそうした反応をひかえさせ，対象間の差異にも充分われわれの注意を向けさせた上で，あらたにそのつどの対象に相応しく修正された反応を準備させるものだ，ということである。一言で言えば前者の硬直性に対しあくまでも柔軟性を回復させようとするのが後者の役割なのである。

ところで問題のことばであるが，その本質を明らかにするためにはこうした習慣的記憶や表象的記憶，さし当っては特に前者との密接な関連に注目しなければならないであろう。すなわちベルクソンによればことばは，そしてとりわけものの名称は，それぞれ人為的に作られた無数の一般観念としての類概念を指示するものであるが，こうしたことが可能なのも，実は，われわれの自然のうちにそれを成立せる条件があらかじめ整っているからであって，それがまず習慣的記憶だというのである[43]。すなわち習慣的記憶とは，上にみたように，一見異った対象であってもわれわれの同一の要求を満足させる場合にはおのずから発動されるような運動機構における同一の反応形式のことであった。また，こうした同じ反応形式が繰り返し発動されることによって，結果として対象の側にも一定の類似をみとめさせるようになることもすでに述べた通りである。もっとも，こうして成立する類似の知覚はベルクソン自身も草食動物の行動などとも比較して見せている通り，まだたんに感じられ，生きられるにすぎないもの，自動的に演じられるにすぎないものであった[44]。ところで人間はかように習慣によって動物の本能を模倣する一方で，ある時点から「そうした（習慣の）働き自体に対する反省」[45]もまた可能になったのである。こうした反省はまず習慣を構成するそれぞれの自動運動に対してあらたにわれわれの注意を

40) Cf. M. M., p. 112.
41) Cf. M. M., p. 112.
42) Cf. M. M., p. 111.
43) Cf. M. M., p. 179.
44) Cf. M. M., p. 179.
45) M. M., p. 179. (　) 内の語は筆者が補った。

向けさせるとともに，その各形態ないし図式をもって一定数の個物を包摂する類概念を表わすものとしても捉えさせたであろう[46]。すなわち本来なら異った対象に対する反応の共通性としての態度や運動にこそ類概念の基礎を認めるべきところを，実際的な必要からかえってそれが対象のもつ共通的な性格の記号として逆転的に把握されることになった，ということである。そしてこうした類を表現する記号としての運動習慣がやがて任意の記号に置きかえられるとき，そこに成立してくるものこそまさにわれわれのことばというものなのである[47]。むろん，現実のことばにおいては，もはや記号とそれが表わす意味としての類概念の関係しか直接的にはみとめられない。しかし以上の経緯をみても分かるように，類概念はわれわれの運動習慣における反応の同一性ということをあくまでもその基礎にもっている，という観点からもう一度見直すならば，ことばは類概念を介してさらにこうしたわれわれにおける一定の反応形式そのものをも同時に指示している，ということも出来るのではなかろうか。

ところでことばがこのように類概念を指示し，類概念はまたわれわれの運動習慣における反応の同一性を前提としている，といっても，これらが適用されることとなる対象は相互に異質な無数の側面をも同時に併わせもっているであろう。したがって上で，知覚にたいして身体の反応が準備される局面で習慣的な反応形式だけに委ねられる場合に生じるおそれのある硬直性を回避するために表象的記憶がどのような役割を果すのかをみたが，これはことばのレヴェルに局面が引き上げられても事情はまったく変らない，ということであって，柔軟なことばの使用にさいしては必らずこの表象的記憶の関与がなければならないということになるのである。すなわち同じ概念で把握されるものであっても，それはあくまでもわれわれのある特定の関心からみてそのようなことが可能であるにすぎず，いかなる対象もそれ自身としては無限に個性豊かな存在だ，ということである。換言すれば，ことばが示す共通性の観点からのみ対象をみるのでなく，同時にそれら相互の間にある差異にも注意を向けることによって，少なくともわれわれは対象の名称を聞いただけでその対象をすっかり理解したかのように思いこむところのいわゆることばと対象の同一視，という速断は充分避けることができる，ということなのである。いな，気をつけなければならないのはたんにそれのみではあるまい。ことばの学習はたいていの場合，批判力をまだ持たない子供のときに行なわれるがゆえに，社会が対象の名称とともに教えるところの価値評価（対象に対して取るべき態度）についてもまたすべてがはたして充分根拠をもったものかどうかを問うべき余地があるであろう。批判的に吟味されることなく取り入れられた分類概念の中には謬見や偏見も数多く含まれている可能性がある，ということである。

Ⅲ

ことばが成立するにいたるまでの諸条件としてベルクソンが取り上げているところはだいたい以上みてきた通りであるが，次にみる W. ジェイムズの場合は，すでにことばが成立している段階からあらためてそれと知覚との関係を問い直す，という，いわばベルクソンの取った順序をちょうど逆様にするような形で議論を進めているように思われる。したがって例えば，ベルクソンで宇宙全体を映すものとして知覚対象それ自体がもつと考えられた無限性は，ことばの限定性と直ちに比較される，というようなことにもなるわけである。すなわちジェイムズではベルクソンと同様な言い方でまず，いかなる対象といえども直接的間接的に宇宙の一切の対象と関係をもっており，そのおのおのの関係が対象の特質をなすのであるから，一つの対象を知ろうとすることは結局，全宇宙を知ろうとすることと同じであり，本来なら際限のない仕事となるはずのものだ，とした上，実際にそうならないのは，われわれがもっぱらそのときどきの関心にしたがってしかものを見ないということ，言い換えれば一つの対象にはただひとつの本質，すなわちわれわれの当面の要求に応えてくれる側面と，それを表わすただひとつの名称があ

46) Cf. P. M., pp. 56-57.
47) Cf. P. M., pp. 56-57.

るだけだ，と考えがちだからである，といった最初から言語がらみの議論になってくるのである[48]。例えばわたしがいま文字を書き込んでいるこの原稿用紙であるが，差し当っては印刷所に送る原稿用の紙きれとしての本質と原稿用紙なる名称しかみとめることができない。しかしジェイムズによれば，それはそうした側面が他の無数の諸特質（例えば可燃物，薄いもの，炭水化物などなど）がとるに足りなくみえるほどわたしの現在の関心をひきつけているからにすぎないのである。ジェイムズにとって，ものの通常の名称やそうした名称が暗示するような特質は，実際にはなんらその対象の唯一絶対な属性を意味するのでないのはもちろん，それらはものの性質ですらなく，むしろわれわれ自身の性質を表している，と考えなければならないのである[49]。むろん，われわれが全宇宙の運行を司る神だというならいざしらず，つねに有限で実際的なわれわれの本性が課してくるところの必然性[50]にしたがわなければならない以上，ものごとをこのように何らかの側面から分類し，したがってその意味ではまたつねにものごとに対して「偏頗」であり，「不公平」で「排他的」であることは避けがたいことではある[51]。われわれの思考は終始行動のために働き，一時に一つのことしかなしえず，たえず「強調」と「選択」とを余儀なくされている，というのがまさにわれわれの現実なのである[52]。しかし問題は，われわれがいつもそうしたことをどの程度自覚しながら生きているか，ということなのである。

ところでジェイムズのこのような議論は，実は，人間に固有な能力とされてきた理性の推理能力というものを解明する過程でなされているものである。すなわち推理とは，いま問題として与えられた具体的な対象をS，そしてSの本質をなし，またSが他の多くの対象とも共有すると考えられる属性をM，そしてその属性自身の特性をPとすれば，すでに一般的に承認されるところとなっている命題「MはPである」を大前提とするとともに「SはMである」を小前提の命題として発見することによって，この両命題から媒介Mを消去した結論の命題「SはPである」に至る，いわゆる定言的三段論法でもって代表されるような思惟の過程をいう。そしてジェイムズによれば結論の「SはPである」を成立させるべく，さし当りまずSの中にPへの媒介Mを探る手続きこそ上の「強調」と「選択」の具体的な意味に他ならないのである。すなわちわれわれは，当面の必要からSの中にP，またはこれに似た特質を期待するのであるが，それを直ちに確認することができないときは次善の策としてSの中に抽象的一般的知識としてPと結びつくことを知っているMを模索することになる，というのである。

ところでこの媒介Mの発見の手続きであるが，それには「類似連合」といわれるものが非常に重要な役割を果す，といわれる[53]。すでにベルクソンにおいてもみたように，事物の中に類似を知覚する，という能力に関してだけならこれは人間以外の動物においてもみとめられることなのである。ジェイムズの場合には，水鳥が氷上や陸上に降りようとするときと，水上に降りようとするときとでは明らかに異った降り方をする例を引き，これは，かれらが水や氷が自分達のとろうとしている行動に対して示すであろう性質をあらかじめ弁別し分類している証拠だ，としている[54]。むろん，かような弁別や分類は意識的に行なわれているのではないであろう。ジェイムズはこの点に関しても実はベルクソンと同様な考え方をするのであって，かれらはそうした対象の性質をせいぜい「受け容れている」(obey)，といえるくらいであろう，としている[55]。つまりベルクソン的に言えば，それはまだ反省された類似の知覚に進むよりも以前の，たんなる生きられる類似の段階にとど

48) Cf. Pr. Ps., p. 959.
49) Cf. Pr. Ps., p. 961.
50) Cf. Pr. Ps., p. 960.
51) Cf. Pr. Ps., p. 960.
52) Cf. Pr. Ps., p. 960.
53) Cf. Pr. Ps., pp. 970-973.
54) Cf. W. James, *Psychology : Briefer Course* (Havard)（以下 Ps. B. C. と略す), pp. 318-319.
55) Cf. Ps. B. C., p. 319.

まっている，ということである。またこうした分類は，かれらの直接的な生の要求，すなわち生得の本能的な関心に直結しており，したがってその数もおのずから限定されているであろう。しかるに人間の場合はまさにこれと反対であって，必要に応じ，そのつど様々な角度からこれを自由に，かつ客観的概念的にとり出すことができるのである[56]。いな，たんにそればかりではない。われわれ人間にあってとり分け著しい特色となっているのは，すでにみたように，たとえ概念的に確定しない対象であっても一定の手続きを通して最終的にはそれを確定させることさえできる点なのである。そしてジェイムズはかような手続きを可能ならしめるものこそ具体的には「類似連合」というものだというのである。すなわちこれはたとえば天才的な科学者などにおいてことに顕著な形で現れることであろうが，かれらははた目には一見どこに共通点のあるのかも分からないような事例を一度に数多く集めることによってついにはそれらに共通する性質を理由とか法則の形で発見するにいたることがあるであろう。ところでこのようなことがかれらにおいて可能になるのも，上の推理の手続きに即した言い方をするなら，実は，当面の課題Sにひそかに含まれる媒介Mが，そのさい同じくこれを含む点でSに類似する対象T. U. V. W... を相次いで喚起するからであって，Mはそのさいこれらの共通項としてかれらの前におのずから「ころがり出る」からに他ならないのである[57]。もっとも，ここで見落してはならない重要な点が一つある。それはこうした対象間の類似点の把握は，また，あくまでも他方における対象相互間の差異の把握を同時に前提している，ということである。というのもここに喚起されてくる対象T. U. V. W....にもしも相違点がどこにもないのなら，すべてが共通ということになって何が最も重要な共通点であるかが明確になりようがないからである。ベルクソンにおいて表象的記憶が習慣的記憶に対し相補的に機能することをみたが，事情を大分異にするとはいえ，やはり差異を把握させるものとしてのイメージの果す重要な役割は見逃すわけにはいかないのである。ジェイムズの場合，イメージ化されるよりも以前の対象それ自身の知覚と，対象がわれわれにとってもつ一定の意味を表わすものとしての名称との関係に言及する形で次のように述べているところがある。すなわち「一つの性質もとくに強調されない具体的な対象が一方にあり，他方には他のすべてのものから一定の名称によってはっきりと区別してとらえられる属性がある。ところですこしも分析の手の加わっていない具体的な事物と完全な分析との間，含まれる性質の抽象のまったくないことと完全な抽象の間にはあらゆる中間段階があるにちがいない」[58]と。そしてさらにこの文章中の中間段階と呼ばれるものについて「漠然と抽象され，一般化された対象の種類の観念」[59]という言い方で，一方で一定の名称で呼ばれはするものの，他方で場合によってはそれ以外の名称で呼ばれることを可能にする側面をも含んでいることを暗示するような説明の仕方をしているのである。ところで上のSの知覚を契機に喚起されるといわれるこれと類似した他の対象のイメージとは，まさにかような中間段階と呼ばれるような形で表象されるイメージのことではないであろうか。すなわちそれらは一方でSと共通な性質をもちながらも他方ではなお差異を表わす側面をも残しているような対象のイメージということである。事実，ジェイムズもベルクソンと同様，イメージについて全体的想起，部分的想起，焦点的想起というような言い方でその復元の程度に段階を設けているのであって，上の場合のイメージはちょうど部分想起に対応するものと考えられるのである[60]。

以上，ベルクソンやジェイムズにおいてことばや概念がどのように理解されているかを主として両者の議論がそれぞれレヴェルを異にしながらもきわめて接近してくる場面においてみてきたが，

56) Cf. Ps. B. C., p. 319-320.
57) Cf. Ps. B. C., p. 317. ただし，科学者による理由や法則の発見の場合，推論は通常の場合とは逆に結論部分がむしろ出発点となって小前提，大前提の順に進むであろう。
58) Ps. B. C., p. 318.
59) Ps. B. C., p. 318.
60) Cf. Ps. B. C., p. 546-547.

最後に先にベルクソンにおいてみたような持続としての意識とこれらが，いったい，どのような関係に立つのかを簡単にみておきたい。そして実をいうと，この点に関しては，ベルクソンよりもむしろジェイムズにおいての方がより一貫した取り上げ方がなされている，といえるであろう。なぜならベルクソンの場合，知覚について検討するにあたっては，すでにみたように，それをもっぱら個々の独立な対象よりなるものとしてとらえる常識の見方をはじめから容認した上で出発しているのにたいし，ジェイムズの方は知覚を取り上げるさいにもあくまでも「意識の流れ」の立場，すなわちベルクソンの持続する意識の立場から出発しようとするからである。すなわちジェイムズによれば，われわれの外界の知覚もまたそれが意識の一つのあり方であるかぎりは，みずからのうちに多様性を含みながらも全体として単一な流れをなしているところの連続体として，まず，みずからを顕にするのである[61]。かれは個別の対象の知覚に先立って存在しているこうした根本的な経験を言い表わすために「多即一」[62]，というような概念を用いていることは周知のところであろう。もっとも，知覚がたんにこの状態にとどまっている間はまだわれわれにとっては何ものをも意味せず，ただ存在している，といいうるだけである。ここでは感覚器官を通して受容されるものと，われわれの内面から生起してくる自発的なものとがまだ分離されず，混然と一体をなしたままである。ジェイムズは流動する意識について "It rains." とか "It blows." という表現があるように "It thinks." といような表現が許されるならばこれが一番ぴったりとその有り様を表わす，と述べている個所があるが[63]，これは日常の意識における主体のあり方とは明らかに異った何か別な主体のあり方があることを暗に指摘しようとするものであろう。いわば自分であって自分でないような自己，自分があらためてそれと合体するのでなければ自分自身のものとはならないような自己，日常の自我にくらべて比較にならないほど大きく，いわば日常的な自我自身もそこから生み出されてくるような全体的な自己がこの意識の流れだ，ということであろう。そしてベルクソンの場合，こうした流れとしての意識から出現してくるおのずからなる行為にこそわれわれの本来の自由がある，とされたわけである。しかしながら A. H. マズローも言うように「表現行動」は「対応行動」，換言すればわれわれの環境への適応行動が首尾よく遂行されてはじめて可能となるものである。そしてそのためには発達心理学が教える通り，この大いなる自己を次第に限定して環境的世界を独立させる一方，そこから必要なものを取り入れ，有害なものを斥ける選択ということを学んでいかなければならないことになる。ジェイムズはそうした手続きの第一段階は具体的にはまず流れの中から注意作用によって個々の対象を独立させることだ，と述べているが[64]，この段階では同時に，そうした対象のイメージの成立も認めてよいであろう。ところでつい先刻もみたが，イメージは対象を極めて忠実に復原するものからほんの一部の性質を抽象するにとどまるものまで無数の段階をなしているであろう。そして対象が自然物であろうと，人工のものであろうと，はたまた人間であろうと，それぞれの文化が注目しなければならないものとして個人に教えるところの抽象段階ごとに一定の名称が与えられることになるであろう。いわゆる概念化の手続きがこれに他ならない。たとえば S. I. ハヤカワが例として引いている「牝牛のベッシー」は，知覚の流れからとり出されたばかりの段階ではまだ具体的な経験の対象であるが，やがてわれわれの目につくかぎりの特徴の総体として抽出されたものが「ベッシー」となり，ひき続いて牝牛，家畜，農場資産，たんなる資産，富のような順で次第に抽象度の高い概念へと上っていくことになるのである[65]。しかしそうすると，われわれの注意や概念化の手続きというものは結局のところ，本来の流れとしての知覚に区分を入れ，また区分せられたものをさらに抽象化し固定化するということだけにつきてしまうのであろうか。こうした

61) Cf. S. P. P., p. 31.
62) S. P. P., p. 32.
63) Cf. Pr. Ps., p. 220.
64) Cf. S. P. P., p. 32.
65)『思考と行動における言語』(S. I. ハヤカワ著，大久保忠利訳，岩波書店) 173頁参照。

疑問点についてジェイムズは次のように答えている。「知覚と概念の重要な相違点は，知覚が連続的で概念は不連続である，という点である。ただし行為としての概念化の手続きは連続的な流れの一部分にほかならないから概念はその存在において不連続なのでなくその意味においてたがいに不連続だ，ということなのである」と[66]。つまりこれを逆にいえば，流れとしての意識の特質は概念の抽象が行なわれる場面においてもなお存続している，ということであり，普通，われわれはこのことにあまり気付かないだけだ，ということになろう。いな，ことはたんにそればかりではあるまい。例えばすでにみたように，われわれが当面する何かある課題の解決をはかろうとして推論の媒介を求めるさいには，課題としての対象と様々な事象との間にある類似はもちろん，それらの間にある差異にもまた同時に注目していかなければならないのである。換言すれば，注意や概念化という過程を通して意識をもっぱら狭隘化させるだけでなく，これと並行してもとの豊かなイメージあふれる世界との関係を取り戻していく手続きもまた必要になってくる，ということなのである。心理学のいわゆる創造的退行なる概念の通常の使用法ではかならずしもないかもしれないが，知性の働く領域においてもまた前進のためにはある種の退行が必要だ，ということであろうか。

66) S. P. P., p. 32.